

令和5年度

大阪大学

一般選抜（前期日程）

解答例又は出題の意図

国語（L）

国語（文）解答例

I

問一

日常を安定化させていた間柄の「である」という規定は、実際には脆く崩れやすい偶然的なものに過ぎず、自分は他の誰かと交換可能で、存在しないこともありえたということ。

問二

「有り―難い」は、自らの存在の偶然性を悟ったうえで他者とともに生きる日常へと戻ることと初めて感じられる、「である」間柄のかけがえのなさ、唯一性を言い表している点で、一般的な感謝の表現とは異なる。

問三

非当事者がもつ「やましき」は、苦しんでいるのが自分ではなく目の前の他者であることの偶然性を悟ったうえで、再び二人の「である」間柄へと戻ることと初めて感じられる、自分の立ち位置が不当なものではないかという感情であり、その点で「有り―難さ」と重なるものだから。

問四

両者の立ち位置の違いは事実的偶然性によるもので、非当事者の「やましき」は当事者の感じる「有り―難さ」と表裏一体である以上、安易に理解を表明して「やましき」から逃れようとすることは、自分だけでなく当事者の唯一性をも軽視することであり、「である」間柄を共有する自他の存在と真摯に向き合わない態度だから。

II

問一

山やトンネルの中のような暗闇に沈潜する生活をしてみたいと思う「わたし」にとっては、「袋小路」や「洞穴」という言葉は美しく思えるが、「貫通」というゴットハルト山を光を遮る障害物としか見なさないような言葉は好ましいと思えないから。

問二

山が国を生み出す母親的存在であると信じながらもそれに男性名を付けることで、男性に国を生み出すイメージを付与することに快さを感じるスイス人の感覚は、富士山を国家の中心であり源のように錯覚させる日本人の感覚と類似していると考えたということ。

問三

国旗を先頭に掲げるスイスの列車を見た「わたし」は、日本において同様の状況を目にし

たら児童の集団疎開という戦争が強いた国と人々との関係を想起して嫌な気持ちになるだろうと感じ、国旗を災害から人々を守る魔除けのように捉えているだろうスイス人と自分の感覚は異なると考えたから。

問四

「わたし」を、身体の中でも敏感な部位である「粘膜」という一部に換言し、それが異物に接触した時の「炎症」という生理的反応と併用することで、鉄道トンネルに貫かれる山と「わたし」の身体を重ね合わせると同時に、ゴットハルト鉄道という未知なるものが、「わたし」に自ずと熱意や期待を引き起こすことを示している。

III

問一

(1) 偶然

(2) どこということもなく、心ひかれてさまよい歩きましたところ

(3) 誰でも、旅の途中で死んでしまったら、火葬の煙もやはり故郷の方になびくだろうか。

問二

阿武隈川の川上の山が連なっているところに煙が立ち上っているのを、舟子たちに聞いたところ、ずいぶん前の元弘の戦乱で煙が立ち、今も絶えないと聞いたから。

問三

本荒の里で、昔は人が住んでいて、今は野良やぶになっているところに、他の萩と色などが異なる萩が咲いている。それを見て、昔はこの萩も散るのを人が惜しんだのだろうかとしみじみとした心情になっている。

問四

(一) 宮城野の萩で有名な本荒の里は、いつから荒れ始めたのだろうか。

(二) ひとつはもともとの意味で、春焼き残した去年の古い枝に咲く萩をいう。もう一つは、「本荒」という土地の名にちなむものだと解釈している。

IV

問一

長者が唾を吐こうとするとき、わたしは真っ先に踏みつけよう。

問二

おまえは何故、わたしの口を踏みつけるのか。

問三

われふまんとほつすといへどもつねにおよばず。

問四

ほかの人よりも先に長者の唾を踏みつけることで長者に気に入られようとする事。

問五

物事をなすには、それにふさわしい時とふさわしくない時とがあることを理解する必要がある。